

交流育む50年



いつまでも 変わらぬ友情を!

旧 虻田町から継続してきた箱根町との姉妹都市提携が、今年50周年を迎えました。半世紀にも及んだ両町の友情を讃えて7月26日に記念式典が、洞爺湖町で開かれます。

箱根町は富士伊豆国立公園、洞爺湖町は支笏洞爺国立公園に属し、お互いに国立公園の町で

あり、また芦ノ湖と富士、洞爺湖と羊蹄山と非常に地形が似ていることや、両町とも観光の町ということ、昭和39年7月4日、姉妹提携の契機を結びました。50年を迎えて、どのような経緯でこの提携が進められていたのか。改めて振り返ってみたいと思います。

虻田町でも洞爺湖温泉の急速な発展によって、昭和35年には、戸数2、334人口も1万人の

ちょうど10年前の提携40年の時、そのいきさつを簡単にまとめたものが、平成16年(2004年)「広報あぶた」9月号に掲載されていますので、その文章を再録して紹介することになります。

これは、虻田郷土研究会のメンバーが、元室蘭民報記者故宮田栄一氏から聞き取りを行い、同氏が保管していた室蘭民報の切り抜きと万世閣社史「白い雲と遠い嶺」を参考に執筆しました。

東京オリンピックの 年に姉妹提携

政府が経済白書「先進国への道」を発表して、経済の拡大と高度成長を指向する路線を明確にしたのは、昭和38年でした。

箱根町との姉妹都市提携宣言式は、昭和39年7月、洞爺湖畔で行われました。

この年は、「東京オリンピック」の開催年。オリンピックに合わせる形で、東海道新幹線が開通し、テレビのカラー放送化が普及し出しました。

虻田町でも洞爺湖温泉の急速な発展によって、昭和35年には、戸数2、334人口も1万人の

大台を超えて11、248人に達し、虻田・温泉間の即時電話が実現となり、翌年の36年には、虻田駅が道内初の特別急行列車「おおぞら」の停車駅となりました。駅名も虻田駅から洞爺駅に変更され、新興の保養地「洞爺湖温泉」の名が次第に全国に知られるようになって、町内は活気にあふれていた時でした。

姉妹都市提携の仕掛け人

浜野 豊さん

姉妹都市提携は、故浜野豊さんの構想から生まれたもので、この姉妹都市提携の仕掛け人といえるでしょう。

浜野さんは、万世閣の創業者、浜野増次郎さんの長男として、大正8年に札幌市で生まれました。旧制の北海道庁立小樽商業学校を経て小樽高等商業学校(現小樽商大)に入学。昭和17年に同校を卒業しました。

卒業した年の10月には、現役兵として、歩兵第25連隊に入隊し、樺太(サハリン)の敷香(しりか)近郊(ポロナイスク)近郊の上敷香に駐屯しました。

敗戦後には、シベリアに抑留され、豊さんは、極寒のシベリアで強制労働に服するなど、筆

舌に尽くせぬほどの辛酸をなめました。昭和22年10月16日、鶴巻港に上陸し復員しました。豊さんが28歳の秋のことでした。豊さんは、復員後ただちに万世閣の経営に参画しましたが、率先して下足番・風呂や便所の掃除などを経験して旅館経営のノウハウを身につけるとともに、旅館経営の近代化を模索し続けました。

昭和36年、万世閣の専務取締役に就任した豊さんは、昭和38年度日本開発銀行資金による融資の対象企業として、運輸省から推薦を受けたのを機会に、ホテル新築に踏み切りました。念願の近代化の第一歩でした。

豊さんはホテル新築落成とともに、政府登録国際観光ホテルの認可を取り付けることを視野に入れていました。当時国際観光ホテルの認可を受けている道内のホテルは、札幌グランドホテル、小樽の北海ホテル、旭川のニュー北海ホテルの三つだけでした。

豊さんは、昭和34年4月虻田町議会議員に当選(以後、4期連続当選)していましたが、そのほか洞爺湖観光開発株式会社取締役社長に就任するなど、道